

## 2 「Do for Smile@東日本」プロジェクト（東日本大震災復興支援）

### 2.1 明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム（岩手県大槌町）

#### 変化する大槌町のなかで

2016年になり、大槌町<sup>おおつち</sup>吉里吉里<sup>きりきり</sup>地区では浸水を逃れた地域で新築の家が建ち始め、年末を迎える頃には浸水地域にも、家の建設が進むようになった。住宅再建が進んでいることから、2017年4月から一部の地域で仮設住宅の取り壊しが始まる。大槌町役場によると、吉里吉里地区ではもとの土地の所有者への引き渡しが2017年3月で終了するという。自力で生活再建ができる住民は、新居で新しい生活をスタートさせている。一方、老朽化が進む仮設住宅で生活を続ける住民もいる。復興の格差に目を向けていくべき時期でもあるといえる。

今年度、本センターによる大槌活動では、年間の参加人数が86名（図1・P35）と震災が発生した年の半数以下と減ってきているものの、今年も活発に活動する1年生が加わるなど、本学と大槌町の関係は確実に引き継がれている。年間の活動についての詳細は学生による報告文書に譲るが、筆者からは、私たちが震災直後から6年関わるなかで、地域や活動がどのように変化したか、そして今後どう変化させていくか、そのヒントとなる視点をいくつか述べていきたい。

#### 震災時の小学生が成長して生まれているもの

2016年4月に吉里吉里学園中学部3年生が修学旅行で明治学院大学白金キャンパスを訪れた。震災当時は小学3年生であり、震災の辛い記憶を今でも抱えている生徒もいるなか、困難を乗り越え、震災と復興のようすについて力強い発表、それに続いて勇壮な<sup>とらまい</sup>虎舞（郷土芸能）が披露された。大学関係者一同が中学生の前向きなパワーから勇気をもらうこととなった。発表では、毎朝中学生が復興工事が進む街角に立って、挨拶活動を始めているようすが報告された。

震災直後から、明学生は震災で遊び場を喪失したり、仮設住宅での生活でストレスを溜める子どもたちに、「わんぱく広場」を開催してきた。そのなかで、吉里吉里での活動に携わる学生たちは「復興に向けて前進する人たちを応援したい」という思いを共有しながら活動を続けてきた。震災当時は支援を受けることの多かった子どもが大きく成長し、支援する立場に変化しつつあることを実感することとなった。

現在も、吉里吉里の小学生は明学生に会えることをとても楽しみにしており、学校に学生が訪れると「次はいつ、わんぱくやるの？」と元気よく声をかけてきている。子どもたちが楽しみにしている「わんぱく広場」が地域で存在感のあるものになり、定着していることは大きな成果といえよう。一方、上述のように地域の若い世代が動いていくことをそっと後押ししたり、見守ったりすることも今後の重要なテーマであるといえる。

#### 活動のリフレクション（振り返り）と評価

大槌町での活動では振り返りの活動が重視され、学生は事前の計画（Plan）、活動（Do）考察（Study）、活動の再構成（Act）というPDSAサイクルでリフレクションを展開している。

筆者は学生が地域との協働関係を構築しながら、当事者の潜在的なニーズを発見し、その充足のための活動を創造していくプロセスについて「創造的リフレクション」と概念化している。西尾（2015）が

いうように、リフレクションは単なる内省ではなく、「動的な営み」であり、活動を振り返ることで、復興におけるニーズを見出したり、その解決に向けて自分たちがやるべきことについて、気づいていくなど、新たな活動へ展開していく基盤となるものである。

この大槌町における活動を3年間継続していた社会学科の学生は、大槌町における活動の振り返りの意味に着眼し、「東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加した学生の学び・変化-Do for Smile@東日本プロジェクト 明学・大槌吉里吉里復興支援プログラムに参加した学生を中心に」というタイトルで卒業論文(内田,2015)にまとめた。そこでは、大槌町での活動が一般的なボランティアと振り返りの構造化という視点で異なると指摘しており、(現地での活動以外でしている)「学生自身が大切にしていること」として、約70%の学生が「事前と事後のミーティング」と答えた、という調査結果を報告している。サービス・ラーニングの理論では、経験と学習をつなぐものとして「振り返り」の重要性が共有されているが、理論上の理解でとどまらず、学生の実感として振り返りの有用性が共有されていることは、リフレクションの意義が活動で定着されていることの表れといえる。

今年度は日常におこなっているリフレクションだけではなく、5年間の活動を相対化する作業にも学生自身の発案によって取り組んだ。これは学生たちが自らボランティアファンド学生チャレンジ賞(学内の奨励金制度。(P81 参照))に応募し、選定を受けて進められたものである。この振り返りから得られた学生にとっての気づきはいくつかあるが、そのなかでもとりわけ三つのことを指摘したい。

まず、子ども支援の意味を見つめ直すことである。学生は、子どもたちとその日どのように過ごすか、どのように楽しい時間になるかに視点が集中しがちであった。しかし、学校評価を専門とする本学の教員から、明学生が接している小中学生が、高校生となる成長の過程、さらに高校を卒業したあとにどのような生活や人生を歩んでいるかを理解・把握したうえで、支援が組み立てられているかという示唆をいただいた。実際、大槌町では高校に入学した生徒の学業継続や進路選択における課題も顕在化していることから、「長期」的な視点で子ども支援の活動を組み立てていく必要に気づかされることとなった。

第二には、震災後の区画整理が終了して住宅再建が進む状況における、支援のあり方である。復興が目に見えるようになり街の再建が進むなかで、活動の軸足をどこにおくかということである。これは、震災当時ボランティアセンター長補佐として、本センターの東日本大震災の復興支援の立ち上げに関わった社会学部教員からの指摘でもある。仮設住宅が解消され、復興住宅への移住が進む状況のなかで、自らの役割を再定義する時期にきているといえる。

今後の活動について、人々のつながりの構築や2015年に学生と住民の協働で制作した「吉里吉里カルタ」を基盤にして、子どもたちに地域の魅力を継承していくなど、いくつかの活動の方向性が考えられている。震災後、さらに子どもの数が減少する地域で、アイデンティティを受け継ぐという非常に重要なテーマでもある。さらに、地域が一丸となって取り組む吉里吉里大運動会への参加など、支援を越えた学生と吉里吉里の関係の構築も生まれている。ハード的な復興が最終段階にあるなか、本センターの活動がどのように質的に転換していくか、創造的に構築していくことが求められるといえる。

第三に活動を地域に引き継ぐ視点である。高齢者福祉を専門とし、震災直後から吉里吉里地区の復興を見守っている本学教員から「中学生や高校生と小学生をつなぐ活動や高齢者と子どもをつなぐ活動は、地元の人々にどのようにバトンタッチするかという視点での検討が必要ではないか」という指摘があった。明学生がアクターとして吉里吉里に関わり続けるだけでなく、当事者である住民の地域参加のために、明学生に何ができるかという活動の転換点にあるということである。これはたやすいことではないが、本センターがこれまで取り組んできた吉里吉里の活動のさらなる成長のためには、乗り越えなく

てはいけないことだともいえる。

### 今後の活動に向けて

2016年4月14日にマグニチュード6.5、16日にマグニチュード7.3を観測する地震が熊本県熊本地方を震源として発生した。益城町などでは、最大震度7を観測し、大学生を含む多くの被害が出た。熊本地震の支援に際して、東日本大震災で被害を受けた岩手県大槌町や陸前高田市で活動する明学生も本センターによる活動に加わった。地震後設立された熊本学園大学のボランティアセンター準備室の学生との交流や意見交換などでは、大槌町での経験が生かされた。社会が学生に向けるボランティアへの期待だけではなく、活動者だからこそ感じている困難なども共有する機会にもなり、それぞれの活動を支え合うという役割も生まれていた。

熊本の支援活動で、大槌と陸前高田で活動する学生が協力して取り組んだことが契機となり、その後は大槌と陸前高田で活動する学生がともに活動する場面も増えた。春休みの事前学習会には、一部陸前高田の学生も合流して進められ、2月の活動には陸前高田の学生も加わった。3月には大槌の学生も陸前高田に足を運ぶ合同プログラムも実施された。今後は震災の風化防止活動や防災・減災活動で協力し合うなど、陸前高田と大槌町における活動の有機的な連携が進む予定である。

先に紹介した活動の評価の取り組みのなかで、活動における創造的な「つながり」の形成が、長期にわたる活動において重要であると学生は締めくくっている。東日本大震災から時間が経過するなかで、活動をどう進めていくか難しい局面にあるが、本センターが従来の枠組みにとらわれず創造的な視点に立つことで、今後の活動を展望していくことを期待したい。

筆者自身は2017年4月より東海大学健康科学部への着任に伴い、明治学院大学における大槌復興支援活動の担当コーディネーターの役割は終えることになる。これまで6年間この活動を見守り支えてくださったすべての方に、この場を借りて厚くお礼を申し上げたい。これからも、立場を変えてではあるが、大槌町をはじめ被災された地域の応援をしていきたいと思っている。また、本活動を立ち上げた者として、引き続き、明学生による大槌の活動への支援を改めてお願い申し上げたい。

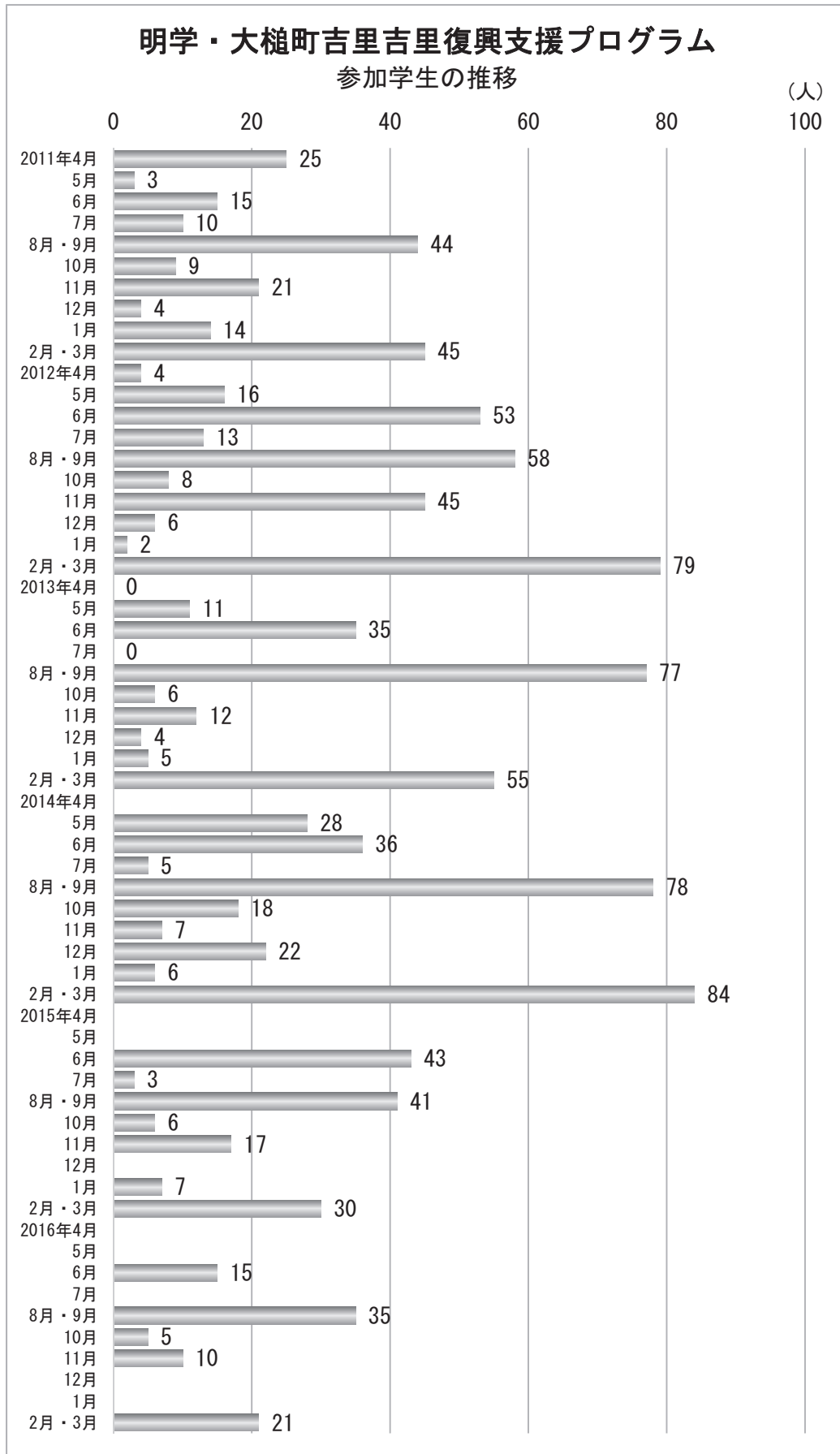
(ボランティアコーディネーター 市川享子)

### 参考文献

西尾雄志 (2015) 「公と私の円環運動 —親密圏が秘める公共性」『承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法』京都大学出版会

内田俊治 (2015) 卒業論文「東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加した学生の学び・変化—Do for Smile@東日本プロジェクト 明学・大槌吉里吉里復興支援プログラムに参加した学生を中心に」

図1



## ●2016年度「明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
4/14（木）	吉里吉里学園中学部3年生が修学旅行の一環で明治学院大学に来校（約120名が来場）
6/3（金）～6/6（月）	スタディツアー（15名）
8/2（火）～8/6（土）	・吉里吉里学園小学部でのわんぱく広場・サマースクール（10名） ・吉里吉里学園中学部での学習支援（10名）
9/5（月）～9/8（木）	・吉里吉里学園小学部での授業「ふるさと科」（7名） ・心理学部・鞍馬裕美ゼミ（学生10名）が大槌町でゼミ合宿を実施 同校での学習支援活動のほか、地域の方々から震災直後や現在のようすなどを伺う
9/16（金）～9/18（日）	生きた証プロジェクト（大学院心理学研究科4名）
9/30（金）～10/3（月）	吉里吉里大運動会（地域の運動会）（4名）
10/14（金）～10/17（月）	吉里っ子文化祭（吉里吉里学園小学部の文化祭）（5名）
11/11（金）～11/14（月）	吉里吉里学園小学部でのわんぱく広場（10名）
11/12（土）	明治学院礼拝堂献堂100周年記念礼拝にて「くまもと新町古町復興プロジェクト」への募金呼びかけ活動（吉里吉里セクションから1名）
2/14（火）～2/19（日）	吉里吉里学園小学部でのわんぱく広場、吉里吉里学園中学部での学習支援を同時期・同メンバーで開催（11名） ※陸前高田セクションの学生が吉里吉里セクション活動に参加することでセクション間の交流・情報共有をはかる ※「わんぱく広場」と「学習支援」の相互乗り入れにより各活動の対象の子どもたちを知り、今後の活動を考える
3/20（月・祝）～3/24（金）	合同スタディツアー（陸前高田セクションと）（10名） ※担当コーディネーター2名も参加、それぞれの町の被災・復興状況やセクション活動を知り、自分たちの活動に生かす

## ◇わんぱく広場・サマースクール

目的	子どもが本来持っている力を引き出す
対象	大槌町立吉里吉里学園小学部の児童
活動内容	・体力向上のため一緒に体育館やプールで遊ぶ ・学力向上のための勉強会の実施 ・ミサンガづくりや折り紙などの創作活動

## 実施概要

わんぱく広場は、震災後、「子どもたちに安全で安心できる遊び場を提供すること」を目的に始まった。現在では、「社会に出れば、『被災したから仕方がない』なんて言葉は通用しない」という地域の声を受け、子どもたちに自立した大人になって社会に出てもらうために、まずは子どもが自分らしさに気づき、それを受け入れること、そして自ら居場所をつくれるようになるために「子どもが本来



持っている力を引き出すこと」を目的とし、吉里吉里学園小学部の体育館や校庭をお借りして活動している。また、大槌町教育委員会主催の「サマースクール」に参加させていただき、子どもたち一人ひとりの学力に寄り添いながら、彼らと夏休みの宿題に一緒に取り組んだ。

### 感想・活動を通して得た学び

吉里吉里学園小学部に通う子どもたちはとても元気である。わんぱく広場を開催する度に彼らの笑顔に元気をもらえる。加えて彼らはとても素直なので、我々の行動ひとつに対しても敏感に反応する。どんなに企画段階で入念に準備を進めていても、当日何名のどんな子どもたちがわんぱく広場に参加してくれるのかわからない。常に臨機応変に対応していかなければ、子どもたちを待たせ、飽きさせてしまう。どんな活動においても重要なことではあるが、わんぱく広場では特に、瞬時の判断力と「待たせない力」が必要と感じる。

### 今後に向けて

震災から月日が経つにつれて、地域のニーズは変化し続けている。上記のようにわんぱく広場においても、変化する地域のニーズに応えられるよう活動してきた。吉里吉里の未来を担う子どもたちと関わる我々にできることは何か。明学生という外部の人間と関わりながら、遊びを通して色々な経験をしてもらうことで、子どもたちに刺激を与える。そんな場としてわんぱく広場が機能してくれたら大変喜ばしい。

(学生メンバー 法学部消費情報環境法学科)

### ◇学習支援

目的	・「個」を尊重し、生徒一人ひとりが必要としているサポートをする ・生徒の「人間力」を育てる後押しをする
対象	大槌町立吉里吉里学園中学部の生徒
活動内容	・学習会—主に勉強を不得意としている生徒を対象として実施 ・授業サポート—生徒の学校生活に介入し1日ともに過ごす 授業の演習時間などで生徒を支援する 放課後の時間では部活動にも参加している

### 実施概要

8月学習会では、三日間の活動を通し、勉強を不得意としている子どもたちを中心に、夏季休暇の課題や受験勉強のサポートをおこなった。各日およそ7年生4名、8年生8名、9年生10名の参加だった。生徒一人に対して学生がほぼマンツーマンでおこなうことができた。

2月授業サポートでは、昼休みを一緒に過ごしたり、部活動を見学したりと、普段の学校生活のようすをうかがうことができた。

### 感想・活動を通して得た学び

- ・問いの答えではなく、答えへと導くプロセスを教えることが大切であるということ。
- ・大学・将来に対しての考えは一人ひとり違うということ。
- ・生徒それぞれの特色を知り、それぞれに合ったサポートや対応をするということ。

### 今後に向けて

勉強を通して、人間力の育成や生徒たちの将来の視野を広げられるよう、大学生という立場を利用して伝えていきたい。また、学生間での話し合いや、吉里吉里学園中学部卒業生の意見も参考に検討し、中学校やボランティアセンターと連携して現在の学習支援を進化させていきたい。

(学生メンバー 社会学部社会福祉学科)

### ◇スタディツアー

目的	震災に立ち向かう方々と出会うことで、参加学生が、生きるとは何かということや、自分の生き方を見つめ直す。そして活動に興味をもってもらう
活動内容	主に新規生を対象として、まずは大槌町の現状を知り、復興への歩みや思いを知るために地域の方々に震災当時のお話を伺い、実際に町を歩いてみる

#### 実施概要

2016年6月におこなわれたスタディツアーでは、初めて大槌を訪れる学生を対象に復興に向かって歩む町の中を実際に歩き、震災に立ち向かう地域の方々から震災当時のお話を伺うことによって、学生自身が、生きるとはどういうことなのかを考え、自分の生き方を見つめ直すとともにさまざまなことを学ぶ機会となった。

#### 感想・活動を通して得た学び

スタディツアーに初めて参加してみて、一番に感じたのは人々の温かさである。町を歩いているだけで声をかけてくださり、これまでの6年間先輩方と地域の方々が築いてきた絆が見えた活動であった。地域の方に震災当時の町や人々のようすをお聞きし、震災が与えた脅威は計り知れないものであると感じた。それと同時に、町を歩くことによって、当たり前のように家族や友人がいて、当たり前のように生活している今がとても尊いものであるということを感じた。また、地域コミュニティについても考えさせられることが多く、人との繋がりが、いざという時に重要なことを学んだ。生きることの尊さを改めて実感すると同時に、人の温かさを感じる活動であった。

### 今後に向けて

人の温かさに気づき得たもの、学んだことを生かして今ある日常を大切に、1日1日を懸命に生きるとともに、今後私たちはどうしていきべきなのかを考え、できることを精一杯やり、人の温かさを教えてくれた現地の方々に寄り添った活動を続けていきたいと考える。

(学生メンバー 法学部法律学科)

### ◇ふるさと科

目的	自分たちの住む地域の文化や方言の良さを再確認してもらう
対象	大槌町立吉里吉里学園小学部3年生の児童
活動内容	吉里吉里カルタを使用し吉里吉里の方言や文化に触れる

#### 実施概要

ふるさと科は、大槌町が震災後に導入した復興教育科目である。ふるさと科では三日間実際に学校の授業に入り、吉里吉里学園小学部3年生と吉里吉里カルタを使用し、吉里吉里語の勉強をおこなっ

た。初日は、明学生がカルタの読み手とクイズの出題者になり、カルタ遊びとそのカルタに出てきた吉里吉里語にちなんだクイズを出題し、吉里吉里語に触れてもらった。二日目は、前日のカルタ遊びを踏まえて、児童たちがカルタ遊びのなかで分からなかった言葉を地域の方に質問し、理解を深めてもらう授業をおこなった。最終日には、前日質問したなかで印象に残った吉里吉里語を絵日記にまとめる授業をおこなった。そもそも吉里吉里カルタは、津波で流失した「吉里吉里語辞典」の復刻を明学生が避難所のスタッフから依頼され、電子データ化し、また、生きた吉里吉里語を残すためにそれらを音声データ化した。その後、地域の方から「残してきたデータを形に残した方が良いのではないか」というご指摘を受け、吉里吉里の豊かな文化や方言をカルタ遊びを通じて伝えるために作成したものである。この吉里吉里カルタは、「世代を超えた文化の共有とコミュニケーションを生む」ことを目的として作られたものであるが、学生が吉里吉里語や、吉里吉里の文化に興味を持ち、地域の方に積極的に学びに行ったことで、地域の方にとって「当たり前」であった文化や方言の価値が素晴らしいものであると再認識してもらうきっかけになったと考える。

### 感想・活動を通して得た学び

児童たちはただカルタ遊びを楽しむだけでなく、明学生の発音やイントネーションを指摘してくれたり、クイズに興味を持って分からないところを質問してくれたりするなど、積極的な姿勢がとても印象的であった。また、「まだ分からない言葉があるから自分のおじいちゃんやおばあちゃんに聞いてみたい」と話してくれた児童や、「これから吉里吉里語を使ってみたい」という児童もいて、自分たちの活動にとってもやりがいを感じた。

### 今後に向けて

ふるさと科の授業を通して、カルタ作成の目的であった「世代を超えた文化の共有とコミュニケーションを生む」場面を実際に自分たちの目で確認することができた。また、若い世代に吉里吉里の文化や方言に触れてもらえる機会ができたことで、自分たちの地域の文化の良さに改めて気づいてもらったのではないかと思う。吉里吉里の素敵な文化や方言を絶やさぬよう、私たちよりも若い世代に伝えていくところから吉里吉里の復興に貢献していきたいと思う。

(学生メンバー 国際学部国際学科)

#### ※吉里吉里カルタについて

大槌町吉里吉里地区の豊かな文化や方言を記録した、地域の方々との協働で生まれた郷土カルタ。

2011年以降、学生たちは幾度となく同地区を訪れるなかで、地域の方々から地域の歴史や文化、地域の方々の思い出を教えていただいた。そうした文化や伝統を大人も子どもも楽しめる「カルタ遊び」を通して継承して行ってほしいという思いから「吉里吉里カルタ」が生まれた。初版は第1回 Gakuvo Style Fund の助成を受けて、2015年2月に完成(30部)。配布先は地域の小中学校や公共施設に限られ、多くの方々から「カルタが欲しい」「自分の家でも遊びたい」という声をいただき、一部改訂のうえ、増補版1,000部を同年8月に発行。発行にあたっては文化庁委託事業「平成27年度被災地における方言の活性化支援事業」の採択を受けた。カルタは吉里吉里学園の児童・生徒に無償で配布されたほか、地域住民の方々にもお配りした。また、大槌町の書店、大学生協での店頭販売のほか、株式会社明治学院サービスを通じての通信販売もおこなっている。

カルタは学校の授業での活用のほか、地域の方々も同じ版を使って「ジャンボカルタ」を制作、PTA主催行事や地域の運動会でも活用されるなど、カルタにより新しいつながりが生まれている。



## ◇生きた証プロジェクト

目的	震災で亡くなられた方の人柄や功績などをご遺族から伺い、犠牲者の方々の生きた証を記録として残す
活動内容	ご遺族から震災で亡くなられた方の人柄や功績等についてお話を伺い、指定の執筆要綱に基づき記録する

## 実施概要

2016年9月16日～9月18日の三日間を通して、岩手県大槌町にて2名の方から震災で亡くなられた方について聞き取りをおこなった。聞き取りの前には役場の方に大槌町を案内していただき、震災時のようすなどをお聞きした。2名の方の聞き取りはそれぞれ役場の方、地域の方、学生2名の4名で1時間半ほどおこなった。後日、録音データをもとに、学生4名が聞き取りの内容を記録として執筆し、大槌町役場の担当者に提出した。

## 感想・活動を通して得た学び

生きた証プロジェクトの活動を通して、実際に被災された方からお話を伺うことで、改めて東日本大震災がもたらした被害の大きさを学んだ。また、震災で亡くなられた方についてお話を伺うことを通して、亡くなられた方を「犠牲者の方々」として一括りにするのではなく、ご遺族の思いとともに、亡くなられた方についてその人柄など、一人ひとりの生きた証を残すということはとても重要であると感じた。

## 今後に向けて

現時点では聞き取りが終わっていない方も多くおり、今後はそのような方々への聞き取りが必要と考える。そのためには、生きた証プロジェクトを今後も継続的にこなうとともに、多くの学生に本プロジェクトを知ってもらい、本プロジェクトを拡大させていきたい。

(心理学研究科心理学専攻)

※生きた証<sup>あかし</sup>プロジェクトについて

東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大槌町が、震災を風化させず後世に残すために実施したプロジェクト。犠牲になられた方の生前の歩みや人柄、震災時の行動などを聞き取り、記録に残すことで、町全体で「故人の歩みを忘れず」「故人を供養し」「災害記録として伝承する」ことを目的として、2014年から2015年度まで2年間実施された。「生きた証プロジェクト実行委員会」は遺族や町内会代表者、町議、学識経験者で構成され、プロジェクト全体の調整役を担った。

2016年9月からは、思いを引き継ぎたいとする町民有志により「生きた証プロジェクト推進協議会」が発足。町も賛同し、聞き取り活動が再開されている。

参考：大槌町ウェブサイト